

1. 渡米前準備期

2016年シカゴ大学の体験記を参考にしてください。

異なる点としては TOEFL100 点と電話面接があります。後者に関しては、今までの体験記を読むと非常に難しいように思われますが、最近は易化しているようです。緊張して電話したもののほんの数分で終わってしまいました。おそらく TOEFL を重要視しているということでしょう。ただ TOEFL スコアなどまやかに過ぎないということを現地で痛感します。これは留学生ほぼ全員が強く感じていたと思います。

注意しなければいけないのは、直前にインフルエンザのワクチン接種を要求されます。僕は既にシカゴにいたので、Walgreen で打ちましたが、あらかじめ打っておいてもよいかも知れません。証明をしっかりとっていくようにしましょう。

2月にシカゴで実習をし、そのまま国内便でボストンに向かいました。連続して異なる場所で実習を予定している人は、荷物など良く考えて持っていきましょう。ハーバードは受け入れが直前になります。結果的に第一希望であったもののシカゴの実習の最終週に連絡が来たため、最後の最後までボストンに行けないのではないかと心配でした。とにかく留学の応募においては、不安になることが多いかもしれません。あらゆる可能性を考慮しておくことが唯一の対策です。



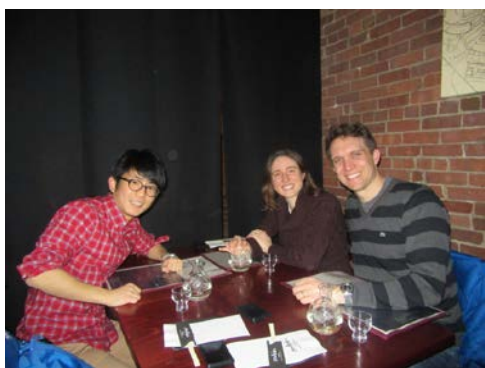
2. 実習記録

3月はボストンに移り、腎臓内科でコンサルト、透析、ICUの3チームを回りました。カルテのアクセストラブルに遭い、電話をかけてもらい回しにされ、実習開始数日間を棒にふるという不本意な体験をしました。分業の進んだアメリカの欠点を目の当たりにできました。暗い話なのでこれはここに書いていいかわかりませんが、非常に性格の悪い女性の fellow に当たってしまいました。「日本や韓国に旅行でいったことがあり、国としては愛しているけれども、わかってなくてもわかっているふりをするとこが嫌いだ。だからお前はしっかりわからない時はわからないと言いなさい。」と初日に言われました。はじめは、なるほどそれが文化なのかと思って納得していました。しかしその後、attendingの前では「いい症例があるから一緒に見に行こう」と笑顔で誘うにも拘らず、いざ2人になってみると「もう一回言ってくれませんか」と聞くだけで、とんでもなく嫌な顔をされるというようなことが繰り返されました。一緒に回っていたグアテマラ人の医学生も彼女に"scream" (彼女がそう表現していました)されたそうで、また、よくよく fellow 同士の会話を聞いていると、その fellow の評判は極めて悪いということがわかり、すぐにチームを変えてもらいました。来年以降同じような体験をするかもしれない後輩たちにめげないで頑張ってもらいたいというメッセージも込めて、敢えて書きます。これを読んで留学したいという気持ちが薄れてしまったとしたら申し訳ないです。しかししっかりと努力していると必ず誰かがそれを見ていて評価してくれます。それはアメリカで強く感じました。とにかく前向きであり続けるということが大切です。僕自身、チームを移ってから、特に後半2週間一緒に回っていた resident と fellow の先生方には大変良くしていただくことができ、彼女達がいなければ僕のボストンでの実習は本当につまらないものになっていたと思います。



少し前置きが長くなってしまいましたが、1ヶ月間の大きな流れを書きます。初めにコンサルトチームに配属

されましたが、上の事情があったために透析チームにすぐに移りました。そこでは CKD-MBD と Anemia の患者を診ました。Volume Status の評価についても学習することができました。透析の時間と半透膜の性質については古典的な RCT が行われており、最近の NEJM でも 1 週間に 3 回 vs 6 回という RCT が行われております。特にアメリカではコストパフォーマンスという点を重視するので、そういう意味でも最も効果的な透析 regimen の確立は不可欠です。このようなエビデンスに実感をもちながら触れることができたのは良い経験でした。患者の病状の変化が乏しいのが少し退屈ではありましたが、後半 2 週間は ICU にいる患者を診て回りましたが、AKI, hyper/hyponatremia, hyperkalemia が主な疾患でした。特に hyponatremia について 3 時間にわたる熱血講義を resident の先生にさせていただくことができ、それだけでもアメリカで腎臓内科を回ったかいがありました。attending も特に電解質の話題が大好きで、移動中もずっとその話をしていました。fellow の先生向けの難しい話でしたが、その熱血講義のおかげで何とかついていくことができました。3 回ほど 10 分程度のプレゼンテーションをしなくてはならず、Cardio-renal syndrome, hyperkalemia, Ca metabolism について勉強するきっかけになりました。



1 日の流れはシカゴの時とほとんど変わりませんが、resident の先生とほぼずっと一緒にいたということが一番の違いでした。おかげであわただしくも非常に充実した毎日を過ごせました。ちなみに、彼女のお父様も腎臓内科医で ARPKD の原因遺伝子を発見した人だということです。そういうサラブレッドのような人がアメリカには沢山いました。旦那さんも 32 歳にして biophysics の教授になったということでした。

3. まとめ

ボストンという町には、言わずもがな Harvard, MIT を始めとした世界最高峰の academia が非常に狭いエリアに集約されています。病院にも優秀な先生方が多く、毎日何か驚くような教えをいただくことが出来ました。毎週の病理の講義をする先生は、uptodate に大変多くの写真を提供している方でした。毎日何気ないところでも色々な宝が眠っている場所でした。これは東大でもそうだと思いますが、しかしエリートが多い反面、やや人々が冷たく、アメリカ人の中でも”East Coast Attitude”と呼ばれているそうです。実際最初数日シカゴで感じた雰囲気とのギャップに驚きました。またアメリカ独立戦争の発端の地でもあり、それらを記念する像などに触れて思いを馳せることができます。そして何より安全で、安心して実習できる環境が整えられていました。

下の写真の Dr. Bonventre はブリガム腎臓内科の chairman ですが、医学者として素晴らしいだけでなく日本人に対する理解も持ち合わせている方でした。直接指導は仰げませんでしたが、カンファレンスなどでの発言からも情熱的な学者であることが伝わってきました。このような世界的に一流の先生方と接する機会があるというのがハーバードに行く一番のメリットだと思います。

改めて丸山先生、グリーン先生、ホルムズ先生を始めとしてお世話になった全ての先生がたと諸先輩がたに深く感謝申し上げたいと思います。

